

手術支援ロボット「ダヴィンチ」導入における前立腺癌の初回治療の変化及び地域別の受診状況について

北見赤十字病院 診療情報管理課
石本莉奈 藤井貴文 中塚友紀 上田初美 島田美由紀 天野日左志 小坂香寿美

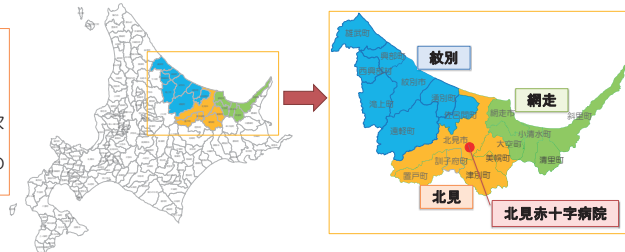
当院について

- ◆病床数：532床（一般病床：490床・精神病床：40床・感染症病床：2床）
- ◆診療科：26診療科
- ◆機能・認定：地域がん診療連携拠点病院、地域医療支援病院、地方センター病院 等
- ◆がん登録数：1718件（2021年）1583件（2020年）1762件（2019年）



オホーツク三次医療圏について

当院は、北海道東部の北見市にあり、オホーツク三次医療圏唯一の地域がん診療連携拠点病院である。
オホーツク三次医療圏は、岐阜県の面積を上回る広大な地域であり、「北網」「遠紋」の2つの二次医療圏で構成されている。
さらに保健所は「北見」「網走」「紋別」の3つのエリアに分けられている。



目的

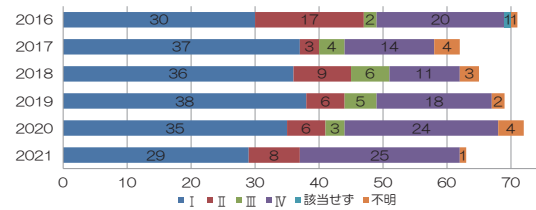
2019年4月オホーツク三次医療圏で初の手術支援ロボット「ダヴィンチ」を導入し、2019年6月よりロボット支援下前立腺全摘除術（以下「RARP」という）を開始した。
これまでRARPを希望する場合は長時間かけて都市部（札幌、旭川等）の病院へ行く必要があったため、地元での治療を希望する患者にとっては選択肢が限られていた。
当院でRARPを開始したことによる前立腺癌に対する初回治療の変化、及び患者の診断時住所から地域別の受診状況について報告する。

方法

- 調査対象：当院の院内がん登録2016年～2021年症例の前立腺癌患者503例
- ①初回治療終了後の症例を除いた402例に対し、臨床期を年ごとに比較。
 - ②RARPが適応となる臨床病期Ⅰ/Ⅱかつ診断時年齢75歳以下の患者177例に対し、初回治療内容を年ごとに比較。
 - ③2019年以降に当院でRARPを施行した患者52例の診断時住所（保健所別）を年ごとに比較。

結果・考察

①臨床病期別件数（初回治療終了後除く）



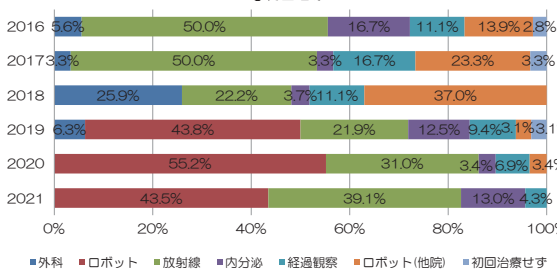
結果

2016年～2021年で前立腺癌の登録数に大きな変化はなかった。
しかし、2020年以降はⅣ期の患者が増加し、RARP適応となる患者は減少していた。

考察

COVID-19の影響による受診控えにより、進行してから発見される症例が増えたことが要因と考えられる。

②初回治療



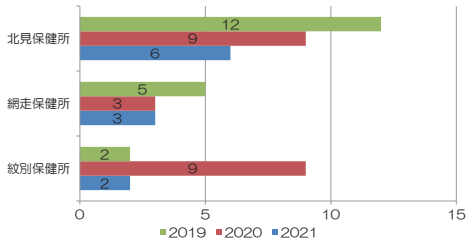
結果

ダヴィンチ導入前：2016年、2017年は放射線治療、2018年は他施設でのRARPが最多であった。
ダヴィンチ導入後：2019年～2021年全て当院でのRARPが最多であった。

考察

ダヴィンチ導入により、臨床病期Ⅰ/Ⅱ期の患者の初回治療は放射線治療が減少し、RARPが主流となった。
導入前は、遠方への通院が困難のため当院での開腹手術や放射線治療等を選択してきた患者が一定数いたが、導入後はRARPが最も選択される治療となった。

③当院でRARPを施行した患者の診断時住所別患者数



結果

当院でRARPを行った患者の診断時住所は北見保健所管内が2019年12件、2020年9件、2021年6件、網走保健所管内が2019年2件、2020年9件、2021年2件、紋別保健所管内が2019年5件、2020年3件、2021年3件であった。

考察

網走保健所管内の患者が2021年に減少した要因として、2021年4月より網走市の病院に常勤の泌尿器科医が着任しRARPが開始されたことが考えられた。

結論

当院でダヴィンチを導入しRARPを開始したことで、初回治療の選択は放射線治療や他院でのRARPから当院でのRARPへ変化していた。
これまで都市部（札幌や旭川等）の病院に行かなければ受けられなかったRARPが当院で受けられるようになったことで、地元での治療を希望する患者にとって選択肢が増え、より希望に添った治療が提供できるようになったと考えられた。

日本がん登録協議会
第31回学術集会
COI開示
筆頭演者名：石本 莉奈
当演題発表に関し、開示すべきCOIはありません。

